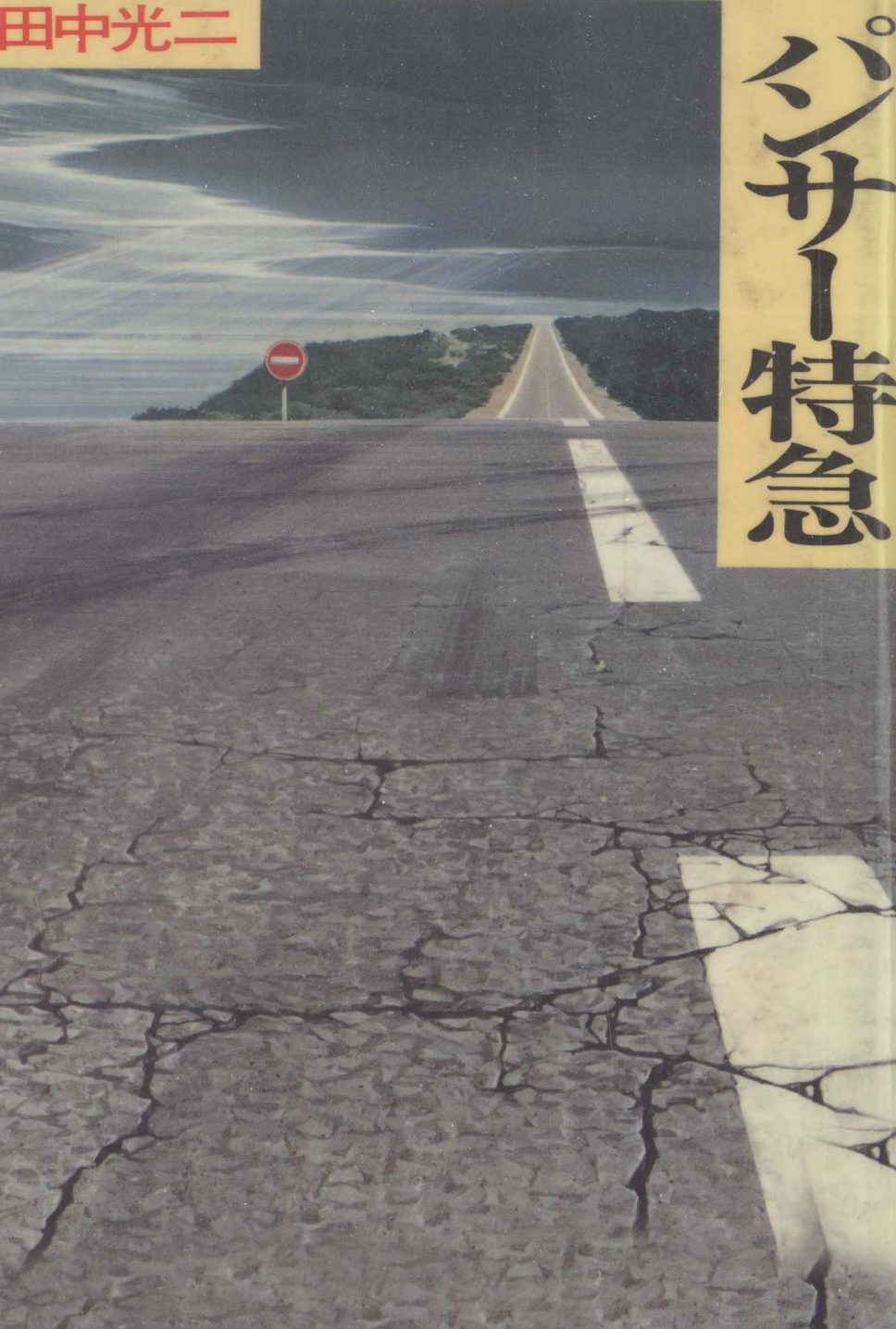


田中光二

パンサー特急



パンサー特急

田中光二

徳間書店



■ 著者紹介 ■

昭和十六年、京城生まれ。早稲田大学英文科を卒業後、NHK教養部プロデューサーとして活躍。昭和四十六年「幻覚の地平線」でSF界に華々しくデビューし、作家活動に入る。

以来、精力的に話題作を発表。その巧みな構成力と視覚的で爽やかな文体は、従来にない大型エンターテインナーとして、今後の活躍がますます期待される作家のひとりである。

『大滅亡(ダイ・オフ)』『わが赴くは蒼き大地』『大いなる逃亡』『爆発の臨界』『失なわれたものの伝説』『大放浪』『銀河の聖戦士』など著書多数。

パンサー特急——目次

コントラクトⅠ	女は北へ疾走 ^{はし} る	5
コントラクトⅡ	パンサー、罌 ^へ を跳べ	31
コントラクトⅢ	さまよう女	64
コントラクトⅣ	パンドラ街道	94
コントラクトⅤ	運び屋ブルース たとえば、愛	120
コントラクトⅥ	天城峠を突破せよ	148
コントラクトⅦ	ラスト・ラン	175

装帧／上原
徹

パンサー特急

コントラクトⅠ

女は北へ疾走^{はし}る

Ⅰ

電話が鳴った。

ベルを四つまで数えて、俺は物憂げな腕を受話器にのぼした。誰でも、寝入りばなを叩き起こされて、愛想よくふるまえる筈がない。——誰とも分からぬ相手

に対してはなおのことだ。

「……もしもし」ざらついた喉にせいいっぱい湿りをくれながら呪詛をこめて俺はささやいた。

「わしだ」低く抑揚に乏しい声がいった。

それを耳にした途端、俺の不機嫌は八割がた吹きとんだようだった。俺にとっては大切な電話であることがはっきりしたからだ。それは、仕事^{しごと}があつたことを告げようとしている。つまりその声の持ち主は、俺の代理人^{だいりじん}だったのだ。

「——寝ていたのかね？」かすかな笑みを含んでいる声が続けた。

「ほんの数秒前まではね」俺は答えた。

「だがもう目は覚めた。あんたのいうことを一言も聞きまらすまいと、耳もがんばっていますよ」

「すまなかつた。しかし、わずかでも眠っておいたことを感謝するようになるぞ。なぜなら当分寝るひまはなさそうだからな。」

仕事だ、それも急ぎのな」

「分かつている。それで荷は何です?」

「そいつはわしにも分からんのだ。依頼人が打ち明けてくれんのでな。」

何しろ相手は女だ。そしてだいたい思いつめておるらしい」彼はふくろ、うが鳴くような笑声を立てた。

「思いつめた女ほど始末のわるいものはない。会って、直接に聞きだすことだな。」

わしはただ依頼を受けて、あんたに連絡したまでだ。ただの代理人にすぎんのだからな」

ただの代理人か。俺は思った——ご謙遜なことだ。彼の存在なくしては、俺の仕事が成り立たぬことは見えすいている。それを重々承知の上でうそぶいているのだ。この老人のささやかな悪癖である。

もっとも、彼について、俺はどれだけのことを知っているというのか。妙な縁から、彼は俺の代理人を買って出ることになった。レース気ちがいの、そしておそらくは莫大な富を所有している気まぐれな老人。それ以上の知識を、俺はこの葛城という名の老人について持ち合わせてはいない。

もうひとつ、彼がこの国の暗黒社会において、隠然たる勢力と、そして情報網をそなえていることもたしかである。その地位を利して、いわば情報産業を営んでいるといってもいいだろう。

ギャング映画の見すぎだなどといっているわけではない——この国にも、れっきとした暗黒社会は存在するのだ。国家に匹敵するほどの強大な規模をもつマフィアにはほど遠いとしても、犯罪を企業とする有機的な組織の数は、決して少なくないのだ。しかしそれは、対社会的な巧妙な偽装や、あるいは公権力や報道機関、大企業などとの癒着によって、大衆に知らされていないだけの話である。

そして彼のいわば口利きで開業することになった俺

の仕事は、彼の情報網のアンテナの力をかりねば成立しないものだった。

彼からの電話であれば、それがいかに非常識な時間にかかろうとも、とたんに俺が心身をひきしめる理由が、これで分かってもえたらうか。

「彼女は二時間後に、駒沢公園の中央広場で会いたいといっている。人目につきたくない事情があるようだ。」

——都合はどうかね？」

俺は腕時計をのぞいた。二時間後といえば深夜の三時だ。その女が生来の夜行性なのか、さもなくば老人のいうとおり、人目をしのぶ境遇にあることはたしかだった。

むろん、ひるみはしなかった。俺の依頼人が、生まれ立ての赤ん坊のようにまっさらな体の持ち主である筈がない。彼らはそのほとんどが法の罅外にいる人間であり、その、荷、もまともにお陽さまの下には出せない代物である。そのためにこそ俺は彼らからとほうもない額の報酬をふんだくれるわけだ。

「分かりました。行くと伝えて下さい。——で、先方

の目印は？」

「美貌だ」老人はあっさりといった。

「本人がいったのだから間違いはない。だいぶ人を食った女のような。気をつけて行くんだな」

しゃべりおえると一方的に老人は電話を切った。いつものことなので、べつだん肚も立たなかった。俺は頭をふりながら受話器を置き、ベッドから立ち上がった。

ふいに、好ましからぬ予感が身内をかすめた。思いつめている女は始末がわるい。美貌がそれに加わるとことはますます複雑になる——それも悪い方だ。経験から、俺はそれを知っていた。

2

ベッドとテレビの他にはこれといった家財道具のない1DKの部屋に一瞥をくると、俺はドアを閉め、ロックした。文字どおり眠るだけの——ときには傷もなめるが——ねぐらである。自らの体臭のこもった巢

にけものが、盲目的な親しみを抱くように、俺もそれなりの愛情をこの殺風景な部屋に覚え始めていた。

しみが浮き出しているコンクリートの階段を下りてゆく。このマンション全体がもうくたびれかかっているのだ。都心に近いという便利さだけが取柄だった。

——スチールドアを開けて地下駐車場へ入った。俺が借り切っている角のスペースへと歩く。二台分のスペースだった。

足をとめ、淡い照明を浴びてルーフを無機的に光らせている二台の車を眺めた。すでに習慣となった仕事だった。

ここにこそ俺の真の財産がある。情熱と経済力のすべてを注ぎ込んだ二台の車。俺の仕事の荷ない手でもある。一台はワゴンだった。最大排気量のロータリー・エンジンを積んだ大型ワゴンだ。最大百三十五馬力という出力は、満載の状態でも、一トンを越える車重をものもしない運動性を誇っている。ハイウェイをぶつとばすにはもってこいの輸送車だった。

もう一台は、コンパクトな千六百ccのセダンだった。

かつてレシプロ戦闘機を製作していた重工業コンツェルンの自動車部門がつくり出した、アベンジャークと呼ばれる新鋭車だ。八百キログラムそこそこの車体に百馬力を越えるツインキャブ・エンジンを積み、おそろしく俊敏だけでなく、バランスのすぐれた足回り設計は、国際ラリーで連覇をなしとげるだけの潜在性能をもっていた。

いわゆるラフロード——峠道や、荒れた未舗装道路にはあつらえ向きの車だった。俺はそのエンジンにさらに手を入れていた。キャブをより高速タイプに代えた上、ポート研磨などのセミチューンによって、出力を四十パーセント近く引き上げていたのだ。サスペンションもヘビーデューティのラリー用に代え、むろんタイヤもごついワイド・スチールラジアルで固めている。

従って、目立たぬブルーメタリックに塗られたこの車は、一見おとなしやかな乗用車の印象とはうらはらな、猙獰な本性を秘めていたのだった。

わずかに思案し、心を決めた。アベンジャークの

ドアに手をかける。運ぶべき荷が不明である以上、小回りの利く車の方がよからうと判断したのだ。

エンジンをあたためながら仕業点検にかかると。――

むろん、決して手は抜かない。大型ジェット機を点検するパイロットなみの集中力を、俺はいつも自分に強いている。なぜなら、その努力がいつかは自分の生命を左右する瞬間が来ることを知り抜いていたからだ。

その姿勢はかつてレーシング・ドライバー時代に培われたものである。そしてこの商売をするようになってから、より真摯になったといえた。この車たちに、文字どおり命を預ける羽目になったことも、珍しくはなかったのだ。

水温計の針が動き出した。燃料計の針がFに入っているのをたしかめてから、俺はゆっくりと車を出した。

3

さすがに道は閑散としていた。都内の道路がもつと

も空く時間である。しかし、時折、せいっぱいに飛ばしている非力なプロパン・タクシーたちを嘲弄するかのように掠め飛んでゆく車の編隊をみかけた。オーバーフェンダーにワイドラジアル、派手なストライプ……いわずと知れた暴走族だ。

マンションのある目黒柿の木坂から、駒沢通りをゆつくりと駒沢公園へ辿りながら、俺は今夜が土曜の夜であることを想い出していた。ある種の若者たちにとってはファンタスティックな夜である。車という強力なマシンに自らを同化させるといふ、変身願望を充足させる夜だった。そして化身しおえたときの彼らの酩酊をはばむ何ものもこの世にはない。

――公園が見えて来た。東京オリンピック時に建てられた広大な公園である。四車線の広い道路に広い園内をつなぐ陸橋がまたがっている。自由通りに面した駐車場に俺は車をつ込んだ。夜間は駐車禁止になっており、鎖がはりめぐらされているが、いわばそれは無視されるためにあるようなものだ。

今もそれは外され、濃厚なカーセックスを楽しんで

いるらしい車が数台、奥のスペースにひっそりと駐まっていた。

俺はひややかにその傍をすり抜けた。他人の密かごとくに心が疼くような年齢ではなくなっていた。植え込みににはさまれた遊歩道を辿って、噴水のある広場へ向かう。バスケット競技場をひかえた広場である。

ただっぴろいコンクリートの平面が、常夜灯の遠い明りを受けてほのかに光っていた。しんとしたその広がりの中へ、俺は足を踏み入れた。左手に、五重の塔めいたシンボル建築を中央に建てた、四角い池の水面がくらく淀んでいた。

広場のほぼ中央で立ちどまった。見通しの利く限り人影はない。一瞬俺は、性質のわるい悪戯におどらされているのではないかという感情を抑え切れなかった。煙草をくわえ、おもむろに吸いつけた。

と、それが合図でもあったかのように、前方の闇の果てに、白いものが浮かび上がった。かすかな靴音を立ててそれは近づき、白いサフリースーツを着た女の姿になった。

「——それでは、あなたが、運び屋。さんね？」数歩の距離をへだてて、女が呼びかけた。

「そうだ」捨てた煙草をふみにじりながら俺はいった。「が、名前もある。佐伯という名だ。それと呼んでくれてもいいぜ」

一歩踏み出し、女を見下ろした。闇にしずんで、その顔は定かではない。が、まだ若いもののようなだった。夜を凝集させたかのようにくろい大きな双眸がほのみえた。続いて、赤い靴が俺の目を惹きつけた。白い服に赤いローヒールの靴。あまりほめた趣味ではない。

「で、荷は何だ？ いつどこへ運ぶ？ ただしっておくが、手間は安くないぞ」

「分かっているわ」畳み込むようにいった。

「いくらたかくてもいいわ——信頼がおけさえすれば。荷は、この私よ。私を浅間山麓——軽井沢の奥まで。はこんでもらいたい」

緊迫にみちたその声が、耳の奥で飴しつづ消えてゆくのを聴きながら、俺はしばらく茫然としていた。なるほど、俺は依頼によってはどんな荷でも運ぶ。荷を

選り好みしないのが俺を繁昌させている理由でもある。原則として、ことづけられる荷のなかみを、俺は問い詰そうとはしなかった。小さなスーツケースから、大きな合金のコンテナまで荷はさまざまだった。あるいは、大麻・ヘロインのたぐいからもぐりの銃砲類まで、およそ考しからぬ代物が俺の運んだものの大部分であつたかも知れない。

あるときは、死体と覚しきものが入った木箱さえ運んだことがある。が、俺の良心はことさら痛みはしなかった。そのような心のメカニズムとはすでに縁を切っていたし、銀行の預金高の数字がはね上がるのを目にした瞬間、すべての屈託は吹き飛んでしまっていた。しかし、生きた人間を運んだことはまだない。人間を移動させる手段はこの国ではこと欠かない。公共交通網は発達しているし、いざとなれば自分でステアリングを握ればすむことだ。

が、ことわる気はなかった。それは俺の主義に反したからだ。

「――よからう」 ゆっくりといった。

「で、いった？」

「今すぐ。出来るだけはやく向こうに着きたいのよ」

「なるほど」俺は肩をすくめた。

「車は持つて来である。調子は完璧だ。乗りさえすればそれでいいぜ」

「ひとっだけいっておきたいわ、あなたを欺く結果にならないために。――これはすごく危険な仕事なのよ。命にかかわるかも知れない。ことわるなら今のうちよ」

俺はふたたび肩をすくめた。

「そいつも分かっている。俺が、大枚を頂戴するのは何のためだと思っているんだね？」

4

三十分後、俺たちは中央高速道に乗り入れ、大月インターナールに向けて走っていた。中央高速道20号線を経由して浅間を目指していたのだ。むろん、17・18号線を経由するルートにくらべればかなり迂回路で

ある。が、彼女の示唆によって俺はこのルートを選んだのだった。

助手席に坐らせ、車を出す前に、俺は訊ねたのだ。

「こっちもひとつだけ訊いておきたい。なぜ車でゆかねばならない？ 信越本線の特急を利用した方がはるかに確実で早い。車でゆくにしても、タクシーを使う手もあるぞ。」

なぜ、苦勞して俺をつかまえたんだ？」

「いったでしょう、これは危険な仕事だって。私は追われているのよ。私の目的地については追っ手も十分承知よ。駅にはもちろん罠がかけられているわ。」

車でゆくしかないのよ。それも表通りは駄目。幹線の要所要所にも、彼らの目が光っている筈よ。どんな間道でも突っ走れるだけの力量と知識を持ったドライバーだけが私をぶじに運んでくれるわ。

それに私自身は車の運転が出来ない。——あなたを選んだ理由はそれだけで十分でしょう？」

「俺の代理人——葛城老人とはどうやってコンタクト

したのだ？」

女はうつすらと笑った。ルームライトに浮かび上がったその横顔は、たしかに俺が息を呑むほどのものだった。まだ二十代のなかばだろう。が、成熟し切った線にふちどられている、けふるような黒い目に、少年のように引き緊った唇を持っている。かたちのいい鼻は、わずかに高すぎるようだ。だがアンバランスとさえいえるこれらすべての部分が、一つのあきらかな魅惑に昇華しているのだった。

「私の父の仕事は、あまりはめられたものじゃないわ。表向きは立派な看板をにかけているけれど、あくどい真似をやっているのよ。あらゆる情報売りさばく老人のことは、父から聞いていた。おそろしく腕の立つ運び屋のこともね。——父のアドレスブックをぬすんで、連絡先をしらべたのよ。」

——ところで、ギャラの話がまだだったわね。いくら払えばいいのかしら？」

「五十万」そっけなくいった。

「ただし着払いだ。ぶじあんたを送り届けた時点でい

ただく。

それよりも、あんたを何て呼べばいい？」

「美津」わずかに恥じらいをこめていった。

「そう呼んで」

「分かった、美津」俺はいったのだった。

「出かけよう……」

——すでに行く手の、多摩丘陵の肩のあたりには曙光が滲み始めている。七月の夜明けは早いのだ。

俺は、法定速度の時速八十キロを保って、ゆったりと車をころがしていた。中央高速道には覆面パトカーが多い。土曜の夜とあってはなおのことだ。可能な限り一般の交通の流れに融け込むこと。——しかしここ一番というときは思い切ってふつとばす。それが俺の運び屋としての心がけだった。もちろんパトカーや白バイとお近づきになることは何としても避けねばならない。

エンジンは、回転数三千ちよつとを示して、不機嫌そうに唸っている。牙をたわめられた猛獣の睡気を催した眩きのようでもある。

俺たちもまた沈黙を守っていた。見知らぬ者同士が肩をならべる羽目になった際の、ぎこちなさの最初の反動が来ているのだった。しかし車が奏でるノイズに耳を傾けながらも、身内にふくれ上がつて来る好奇心を俺は抑え切れなかった。

無理からぬことだったろう。今回の荷は、ものいわぬ金属の箱やコンテナーではない。温かい血肉をそなえた人間——それも俺の五感がいやおうなしに奮い立たざるをえないみずみずしい女である。

追われていると彼女はいった。何が彼女を追っているのだ？ 浅間山麓で彼女を待っているものは何だ？ 頭をふって妄念をふりはらった。ビジネスに関して、自らに課したルールをはみ出すことが、いい結果を招く筈がない。託された荷を確実に目的地に運ぶこと——それだけが、俺の仕事のルールなのだ。

バックミラーに光が映じた。俺は目を細め、その正体をすかし見た。十台近い車が、二車線にまたがって迫ってくる。もう白みかけているというのに、ごていねいにフォグランプを煌々と輝かせていた。気まぐれ

小鳥のように、車線から車線へ移り飛びながら、猛スピードで追いついて来る。

俺はかるい吐息をついた。またしても連中だ。やつらが狩りの最中だとすると厄介なことになる。下地のある者が見れば、俺の車が、猫かむりをした獅子だということに一目で気付くだろう。挑発しがいのある獲物だというわけだ。

文字どおりまたたく間に、俺のアベンジャーは彼らに取り囲まれていた。さかんにシフト操作をくりかえし、エンジンを空ぶかしさせながら、幅寄せして来る。いずれも白塗りのスポーティカーやGTだった。ホイールまでが白く塗りつぶされている。白が、彼らの紐帯（きんたい）のしるしなのだ。おおかた、白魔団とでも名乗っているのだろう。

俺は彼女の横顔をうかがった。いざとなれば彼らを蹴散らすのはたやすい。彼らはしよせんスピードの極限状況の味を知ってはいない筈だ。が、彼女に替えるいろは見られなかった。かるく目を閉じたまま、シートに寛（ひろ）いでいる。

俺はしずかに肩の力を抜いた。もともと、このような餓鬼どもとかかずり合う気持はない。——二十年前の俺なら別だが。

挑発はながく続かなかった。亀よろしく首をすくめたままのアベンジャーに愛想を尽かしてか、ふいに先頭が嘲けるようなエンジンのレーシング音を響かせて加速した。たちまち彼らは一本の流れる矢となって、ハイウェイのかなたへ遠ざかっていった。

かすかに淋しかった。もう俺は二十年前の自分には戻れない。熱い血を、ただそのたぎり立つ音をたのしむだけのために沸き立たせることはかなわない。そのような幸福は、もう俺には許されていないのだった。

5

大月インターを下り、20号線に入ったのは朝の五時半だった。とうに夜は明けていた。谷あいをうねうねと笹子峠へと登りつめる道を、車は快調に飛ばした。今のところ、行く手をさえぎる何ものも、出現の兆候